love storys

皐月 誘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙｓ

【Ｎコード】
Ｎ２２９０Ｃ

【作者名】
皐月　誘

【あらすじ】
この小説は６人の少年少女の高校３年間を１話完結のシリーズで描きます。タイトルとなるお題や、どの登場人物の話を読みたいなどのリクエストは感想から大募集ですので、よろしくお願いします。

登場人物

登場人物紹介

★種月（タネツキ）　泉（イズミ）
性別：男
クラブ：陸上部
スポーツも勉強も完璧。さらに勝気な性格で、敵を作りやすい。
女の子のような顔がコンプレックス。

★朝穂（アサホ）　定（サダカ）
性別：男
クラブ：サッカー部
サッカー少年でスポーツは得意。ただ、人見知りをするので友人は少ない。
緊張すると真っ赤になる。

★秋山（アキヤマ）　実（ミノル）
性別：男
クラブ：バスケ部
顔がいいのでモテるが、やる気は無い。
また、モテる自覚があるせいかタラし。

★永峰（ナガミネ）　椎歌（シイカ）
性別：女
クラブ：陸上部
曲がった事が大嫌いな美人。冷めた性格をしていて、学校では浮いた存在。

★山野（ヤマノ）　雪（ユキ）
性別：女
クラブ：吹奏楽部
大人しく、押しが弱く、ひたすらに優しい美少女。

★冬岡（フユオカ）　伊織（イオリ）
性別：女
クラブ：バスケ部
元気いっぱいのスポーツ少女。誰とでもすぐに仲良くなれる。

この6人の高校3年間を1話完結のシリーズとして描きます。

☆お題大募集☆
話のタイトルや、どのキャラの話を書いて欲しい等のリクエスト大募集です！
感想よりお願いします。

フェンスの向こう（前書き）

今回のお話は永峰椎歌ｓｉｄｅです。
種月泉と秋山実が出て来ます。
１年生９月のお話です。

フェンスの向こう

屋上のフェンスの向こうにいるあんたは、なんだかチャラチャラしてて、すごく腹が立ったの。

フェンスの向こう　ｓｉｄｅ椎歌

「なぁ、そろそろ帰ろうよ」
種月泉にそう声をかけられて、私は足を止めた。
泉は同じクラブで、私の走り方をキレイと誉めてくれた人。
「もう少しだけ。」
と、短く返すと
「わかった。早くストップウォッチ貸せよ。タイムとるんだろ？」
泉は部室へ向かうのを止めた。
頼んでもないのにいつも待っていてくれる…それが嫌味じゃなく出来る人。

走りながら、考えた。　　なんで…今日はこんなにイライラするんだろ？
そして、あるシーンを思い出す。
同じクラスの秋山実。彼はいつも私をデートに誘ってくる。
私だけじゃない。クラス…いや、学年の女の子みんなじゃないかと思う。
そんな実が今日、昼休みに屋上で数人の女の子に囲まれて、嬉しそうにしていた。
引き返そうとした私を追い掛けて、実は言った。
「妬いてんの？でも、俺は本気で椎歌ちゃんだけが好きだから。」

妬いてる訳じゃない。あんないい加減なやつは恋愛対象でもない…。
「椎歌。もぅ帰ろう。そんなんじゃタイムも伸びないし。」
泉の言葉に我にかえる。
「うん。ごめん…。」
なんで実の為に私がイライラしないといけないのか、なんだかバカらしくなってきた。
先を歩く泉の後を追う私は、人工的な明かりに気づき、再び足を止めた。
「あれ？ねぇ、泉あそこって…」
「あぁ、バスケコートだろ？まだ誰か練習してるんだな。」
それがどうかした？とでも付け足しそうな物言いの泉は足を止める事も無く、部室へ向かう。
私は反対にその場から動けなくなる。それは純粋にライトと月明かりのスポットライトを浴びて、必死に練習してる実の姿が素敵だと思ったから。
いつもは、俺は練習しなくても上手いからいいんだよ。なんて言ってるくせに…。
あんなに必死に練習してるなんて反則だよ。少し笑えた。
「椎歌？」
そんな私を泉が不思議そうに振り返る。
「なんでもない。」
すぐに泉に並んで歩きだすと、さっきまで実を照らしてた月が、私達を照らしている気がした。

屋上のフェンスの向こうにいるあんたは、なんだか腹が立つけど、バスケコートのフェンスの向こうのあんたはなかなかカッコイイよ。伝えてもしょうがないから、私の中に閉まっておくけどね。

フェンスの向こう（後書き）

【フェンスの向こう】を読んで下さってありがとうございます。
今回は椎歌が主人公でした。
次回は朝穂定の話を書く予定です。
感想やお題（タイトル）をくれると、泣いて喜ぶのでお願いします。

階段（前書き）

今回の主役は朝穂定（アサホ サダカ）です。
舞台は音楽室。
サッカーでケガをした定と、雪が将来について語ります。

階段

階段を登る事は、しんどい。
階段を降る事は、むなしい。
じゃあ、登りもせず、降りもせずにその場に座りこんでしまうのは…？

階段　ｓｉｄｅ定

「足、ケガしたんだって？」
山野雪がケースからフルートを取り出しながらたずねた。
「あぁ。治るまでクラブも出れないんだよ。あっ、ここに居ると練習の邪魔か？」
音楽室の机に突っ伏していた俺はゆっくりと身体を起こす。その時に振り返った雪と目が会って、自分でも真っ赤になるのがわかる。
「邪魔じゃないよ。人に聞いて貰うのっていい刺激になるし…定君とは約束もしたし。」
約束をしたのは、初めて会った時。
俺の一目惚れだった。でも、まだこの気持ちを伝える事なんて出来ない。

雪の奏でる音楽は、雪そのものの様に優しく優しく流れる。
「雪は…プロになるのか？」
休憩に窓を開ける雪の背中に向かって問いかける。
雪のフルートが上手かどうかは、音楽に真剣に取り組んだ事の無い俺にはわからない。けど、俺にとって雪の奏でる音楽ほど心安らぐものも無かった。

「プロなんて…。でも将来大人になってもフルートに関わっていたいと思う。それが仕事になったら…幸せだなぁ。」
謙虚な、けれどもしっかりとした意思表示。
雪らしい。雪と言う女の子について、そんなに詳しくは知らないが…それでも、雪はこういう子なのだろうと、愛しいと思う。
「なれるよ！雪ならなれると思う。俺は音楽は詳しくないけど…雪の音楽は好きだよ。」
こんなセリフを言うにも真っ赤になってしまう。
言われた雪は、クスクスと小さく笑った。
「ありがとう。そんなこと言われたの初めて。ところで定君は？」
「…え？」
予想外の質問だった。
「クラスの子が定君は1年なのにサッカー部のレギュラーなんだよって騒いでたよ。」
「プロには…なりたい。でも、俺くらいの奴はいっぱいいるし。上に行くほどさ…俺は大したことないって思い知らさるみたいで…。」
実際に今回のケガだって、伸び悩む自分の成績に焦ってのオーバートレーニングが原因だ。
「階段を登り続けるのってしんどいよね。でも降るのは、今までの練習が無駄になるみたいでむなしいし…。でも、その場に立ち止まるのはカッコ悪いと思わない？」
雪は窓の外を見ながら言う。その視線の先ではサッカー部が練習をしていた。
「カッコ悪い…かぁ。」
「それにね、見てみたいでしょ？登りきったら、そこに何があるのか。高ければ高い程、辛ければ辛い程、きっとキレイな景色が広がってるハズだよ。」
そう言った振り返った雪の笑顔が胸に響く。
「俺も…見てみたい。だって、まだまだ頑張れるしさ。」
俺が言い終わるのを聞いて、雪は再びフルートを奏で始めた。

その音色は、思わず涙が出そうなほど優しく、
「ありがとう」
と言う俺の呟きをゆっくりと溶かしていく。
彼女はいつから気付いていたのだろう？
俺が悩んでいた事を。
彼女の音楽に答えを求めていた事を。

階段を登る事は、しんどい。
階段を降る事は、むなしい。
階段を登りも降りもせずに立ち止まる事は、カッコ悪い。
さぁ、休憩を終えたらまた歩きだそう。
１歩づつでいいから、ただ高みを目指して。

階段（後書き）

シリーズの2作目でした。
定は真っ直ぐな少年で、雪は定よりは大人な女の子…に書けてたら嬉しいです。
感想・リクエストなどなど大募集なのでお願いいたします。

夏の日のこと（前書き）

今回の主役は冬岡伊織。
あとは朝穂定が登場します。
時期的には１年生の８月のお話です。
意地っ張りって、損する事多いですよね…。

夏の日のこと

私から言い出した事なのに。
私から言い出した強がりなのに。

夏の日のこと　ｓｉｄｅ伊織

あ…暑い。
夏休みも中盤。
高校生になったって言うのに、相変わらず部活に明け暮れる私。
にしても…暑すぎる。
「先輩…、ちょっと水飲んで来ます。」
休憩までは時間があるけど、こっちは生命がかかるってくらいに喉が渇いている。

フラフラと体育館を抜け、炎天下の日差しを横切って浄水器のもとへ向かう。
なんで、この学校は飲み水が一ヶ所にしか設置されてないんだろう…。
こんな暑い日は毎日そんなことを考えてる気がする。

ふと、眩しいのを我慢して視線を上げる。
そこにはユニフォームを来た少年が一人居るだけで…。
よかったぁ。他の部活の休憩時間とかぶってなくて…と思ったのはたったの一瞬で、
「あっ…伊織…。」
そう呟く気まずそうな少年―朝穂定を見た瞬間に喉の乾きなど忘れ

た。
彼は同じクラスで、１年にしてサッカー部のレギュラーで…昔、付き合っていた人だった。
昔と言うのは、中学時代の事で、まさか彼と同じ高校になることも、同じクラスになることも想像していなかった。

長い沈黙…。
「サッカー部も毎日大変そうだね。どうなの、調子は？」
私が話し出さないと、ヘタレな定が話せるわけない。なんだか…相変わらずだな。
「うん。まぁまぁだよ。夏の大会もなんとか勝ち残ってるし。そっちは？」
「うん。普通かな？」
なるべく自然に。
「普通って何だよ。お前って相変わらずだな。」
定がやっと笑った。
人見知りな彼の笑顔を知っている人は私を入れて何人いるのだろう？
「朝穂こそ…相変わらずだよ。相変わらず、ヘタレ。」
コレを言うと定がムキになる事を私は良く知っていた。
しかし、定は意地悪く笑う私を見据えて言ったのだった。
「あの時は悪かったよ。でも…別に名字で呼ばなくてもいいだろ？」
今更…そんな事…。
「何言ってるの？私がフッたんだよ。それに名字で呼ぶのはただのケジメ。私…今は泉君が好きだし。」
半分本当。半分は…わからない。
「泉…か。そっか、あいついい奴だしな。」
少しショックそうな定に、私は変な心境を感じている…。
ヤキモチを妬いて欲しい…？
そんなハズない。
私は確かに種月泉君が好きなのだから。

「そういう事。だから朝穂も私の事、冬岡って呼ばないとダメだよ。」
「でも伊織…。」
「ふ・ゆ・お・かだってば。」
定の反論にわざと重ねる。
今なら自分の気持ちがわかる。
私は否定して欲しいんだ。
私がどれだけワガママを言っても定には
「伊織」って呼んで欲しい。
なんで私は、こんなにも素直になれないだろう…。
「わかったよ。冬岡って呼べばいいんだろ？じゃあ、俺そろそろ戻るから。部活頑張れよ。」
定が私の本当の気持ちに気付けるような器用な奴じゃないのは知っていたのに。
「じゃあね…定。」
だいぶ遠く、小さくなった背中に言う。
朝穂の背中は夏の陽炎と、私の涙で滲んでいる。

いつならやり直せただろうか？
いつなら素直になれただろうか？
今はもうただの後悔。

夏の日のこと（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。
なんだか恋愛色が強い話が続きますが、友情の話も書きますよ！
次は…まだまともに出てきていない実の話にしたいです。
感想や好きなキャラなんて教えて貰えると凄く励みになります！
お願いいたします。

優先座席（前書き）

今回の主人公は秋山実（アキヤマ ミノル）。
ほとんど彼の一人語りなのですが…一応、椎歌が出て来ます。
小さないい事…貴方には出来ますか？

優先座席

初めて見たのは電車の中。
優先座席に座ってる片耳ピアスに茶髪の君。

優先座席　ｓｉｄｅ実

永峰椎歌。左だけに開いたピアスに、長いストレートの茶髪。
一応、進学校と言われるうちの学校では少し浮いた存在。
でも一番重要なのは、とびきり美人って事。

俺が彼女を初めて見たのは、入学式の日の電車の中。
最初に目についたのはもちろん進学校の制服と彼女がアンバランスだったから。

へぇ…。こういう子も居るんだ。
少し安心した。俺、３年間遊べないのかと思ってたし。
ってか、すげぇ美人だな。
先輩か…？少しは遊んでくれっかな？

なんて事を考えてた時、俺の目の前を２人の老人が通過する。
気にもとめてない俺はもう一度彼女の方を見た。
「よかったら、ここ座って下さい。」
それが初めて聞いた君の声。

ってか、今時老人に席譲るなんて…珍しい子だなぁ。
席立ったって事はこっち来ねぇかな？

俺の頭の中は、どうやって彼女のアドレスを入手するかでいっぱいだった。
「ねぇ、席代わってあげてよ。ここ優先座席だよ。優先座席の意味は…わかってるよね？」
その声に視線を戻す。
彼女が隣に座っていた他校生に言った言葉だった。
車両中の視線が、彼女の今時珍しい行為へとそそがれる。

老人2人が優先座席に並んで座り、深々と彼女に頭を下げていた。
俺は、否定の意味で小刻みに手をふる彼女のその笑顔に目を奪われていた。
あぁ…こういうのが美人って言うんだな。

あれから入学式で同じ1年である事を知り、運命的に同じクラスで永峰椎歌という名前を知った。
残念な事は未だに彼女のアドレスを入手していない事だ。
「椎歌ちゃん。一緒に帰ろ。」
いつもこんな感じで押しまくりの俺に、彼女がアドレスを教えてくれる日は近い。
「いつも言うけど、なれなれしく名前を呼ぶな。私、部活だし。」
…近い？
とにかく、今日も一人で帰る。
俺だって部活あるんだけど…まぁ、今日はもう気が乗らないからサボるけど。
「ハァ…」
ため息を1つつき、顔を上げると1人の老人。
俺は反射的に腰をあげて席を譲る。
…何やってんだ。俺らしくもない。

でも…嫌な気分ではない。
そんな自分に自然と口元がゆるんだ。
優先座席はお年寄りや身体の不自由な人に譲りましょう…ってか？

優先座席（後書き）

ってわけで、彼が彼女を好きになる理由は優先座席でした。
読んでくれてありがとうございます！
次は…種月泉かな？そろそろ友情モノ？？
まだわからないですが、次回もお願いします。
感想やリクエストを頂ければ励みにして、更新ペースがあがると思うので、気軽にお願いします。

喧嘩（前書き）

今回の主人公は種月泉。
１年生の１０月のお話です。
朝穂定が出てきます。

喧嘩

コンプレックスも含めて自分なんて思える程、まだ大人じゃないけど。

喧嘩　ｓｉｄｅ泉

「今、チビって言った？ちゃんと聞こえてるんだけど。」
後ろにいる２人組を振り返り、睨み付ける。
制服のバッチが青。１つ年上の２年生だ。
そんな俺はの様子に、隣を歩いていた定も足を止める。
「泉…２年生だぞ。やめとけよ。」
これだから、定はヘタレなのだ。
人を侮辱するのに年なんて関係ない。「聞こえるように言ってんだよ。お前、１年の種月だろ？なんか、２年や３年の女子に可愛いとか騒がれて調子に乗ってるらしいなぁ。」
今どきそんな理由で喧嘩を売ってくる暇な人間っているんだ。
驚きと同時に馬鹿らしくなってきた。
「なっ…泉は調子に乗ってなんか…。」
食ってかかろうとする定を片手でなだめ、１つため息をつく。
あぁ、なんて馬鹿らしい…。
「確かに俺は種月泉だけど…まずあんた達誰？まぁ、人を見掛けで判断しちゃいけないって事も知らないような非常識な知り合いいないけど。ってか小学校で習って来なかったの？人は見掛けで判断しては行けませんって…あっバカにしてる訳じゃないんだよ。忠告してやってるんだ。」
一息にそこまで言う。隣には頭を抱える定。

前にはキョトンとする先輩方。まぁそんな状況は長続きもせずに、彼らの顔が真っ赤になる。
「てめぇ…。」
人間言い返す言葉がなくなれば後は暴力だ。
「定。先行ってていいよ？」
横では無言のままの定が首を横にふる。
「どうなってもしらないからな。」
今度はしっかりと首を縦にふる定を見て、つい口元がゆるんだ。

「痛てぇ。」
定が心なしか涙目で訴えてくる。
「だから、先に行けって言ったのに…。」
そんな定より、俺の方が明らかに重症だ。
「だって…泉1人じゃ勝てないだろ。」
「あぁ、役に立ったつもりなんだ…。」
とびきりの笑顔。
笑顔で酷い事言うのはもう趣味みたいなものだ。
「うっ…。」
「嘘だよ。…ありがとうな。」
嬉しそうにする定を見て、少しだけ自分の発言を後悔する。
「1年2組の朝穂定。種月泉。すぐに生徒指導室まで来てください。」
校内中に響くスピーカーの音。
誰だよ…先生なんかに言ったやつ。
そうは思いながらも、
「ほら来た。停学くらいは覚悟しとけよ、定。」
なんて、強がりを言う。
定の困った顔を見るのは俺の趣味みたいなものだから。
「俺、怖くなってきた…。」
その言葉で俺は余裕の笑顔を取り戻した。

コンプレックスを認められる程、大人にはなれないけど、今の自分を嘆くなんて無駄な事はやめよう。
いくら悪い条件だって、みんながビックリするくらいデカい事を成し遂げよう。
だって、俺は俺でいたいから。

喧嘩（後書き）

…恋愛要素なしのお話はいかがでしたか？
タイトルはｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙｓなのに…。
定の登場回数が多いのは彼が単純で動かしやすいからです。定の話ばかり思いつくし…。
よければ、感想などをお待ちしています。

出会いのメロディ（前書き）

1年目の入学直後のお話で、主人公は登場率一番な朝穂定。
小さな小さな恋の始まり。

出会いのメロディ

一目惚れなんて、信じてなかったし…少しバカにしてたくらいだし…。

出会いのメロディ　ｓｉｄｅ定

俺は耳を押さえた。
「耳ふさいだって無駄だぞ。入学して1週間にもなるのに…友達の1人も出来ないなんて…情けないにも程があるぞ。」
ふさいだ手のひらをむなしくもスルーして泉の言葉が耳に…心に刺さる。
入学から1週間。
俺があいさつ以外の会話を出来るのは中学から一緒の泉だけだ。
「わかってるよ…。俺だって友達くらい作りたいし…出来れば彼女だって…。」
「彼女って…お前、中学の時付き合ってた他校の子は？」
伊織の存在は話した事はあるが、そんなに詳しい事や、フラれた事、そしてまさか同じクラスに元カノがいる事などは話していない。
「…だいぶ前にフラれたよ。」
「へぇ。せっかく出来た初めての彼女だったのにな。」
泉はたいして驚く様子もなく言った。

伊織と出会ったのは、俺が伊織の中学に練習試合に行った時。
試合が終わって、帰ろうとした俺はタオルを忘れて来た事に気づいて、急いで戻ったんだ。
そこに居たのが伊織。

そう…丁度この曲が校舎から溢れ出して校庭に響いて…。
「えっ…何でこの曲…？」
ふと意識を戻すと、校舎に溢れる思い出の曲。
この曲は伊織を迎えに彼女の学校へ行くたびに聞いていたんだ。
聞き間違えるハズがない。
「ちょっと定！いきなりどこ行く気？」
呼び止める泉を無視して、走り出す。
向かう先は考えるまでもなく曲の出所…音楽室だ。
階段を2階分かけあがるだけで息切れするようなやわな鍛え方していないおかげで、音楽室にはすぐに辿り着いた。
少し深呼吸して、ゆっくり戸を開ける。

なんて言ったらいいんだろう…？
俺は言葉を失った。
窓際に腰掛け、フルートを吹く少女。
その髪をなびかせる風と共に舞い込む桜の花びら。
全てを包み込む音楽。
俺は頬が自然と熱くなるのを感じていた。

「へぇ。凄く上手じゃん。ソレ、何て言うの？フルート？」
隣から聞こてくる声にビクッとする。泉が追い付いて来たことに全く気づいてなかった…。
「…泉くんと朝穂くん。」
彼女がキョトンとしてこちらを見る。
なんで…名前を？
「おい。泉！お前、知ってる人か？」
俺はなるべく声をひそめ、それでも勢いよく泉に尋ねた。
「なんで定は知らないかなぁ。同じクラスの山野雪。俺の幼なじみだよ。」

俺が声を潜めた意味は、泉の声の大きさに無意味なものになる。
「同じクラス？幼なじみ？」
本当にこんな可愛い子、クラスにいたか？
って言うより…泉の幼なじみって…。
「そう。話すのは初めてだよね。でも話は伊織から良く聞いてたよ。サッカーが上手で自慢の彼氏だって！あっ伊織とは中学からの友達なんだ。よろしくね、朝穂君。」
伊織の友達って…俺はどこまで運がないんだ…。
ちらっと横にいる泉を見ると予想通り笑顔を浮かべている。
俺は他の誰よりもよく知っている。笑顔の泉が一番怖いんだ。
「へぇ…伊織って同じクラスの冬岡のことだよね？初めて聞いた。」
楽しそうに笑うなよ。
逃げ出したくてたまらなくなる。
「泉…そろそろ帰るぞ。」
無理矢理に泉を音楽室の外へ追い出す。
俺もすぐに出ようとして、思い出したように振り返る。
「あ…あのさ…。」
キョトンとした彼女が目の前にいる。
熱くなる頬を感じながら、それでも自分の背中を押す。
俺だってヘタレでいたいわけじゃない。
「あの…伊織とは中学卒業前に別れてるから。んで…また聴きに来ていいかな？」
言うだけ言って、返事を待たずに音楽室を飛び出した。
「定…。真っ赤だよ。なんだか…いろいろ聞かないといけないことがあるみたいだな。」
泉が意地悪な笑顔で待っていた。
真っ赤な顔は一気に真っ青になる…。

ゆっくり流れ始めた、それが2人の出会いのメロディ。

出会いのメロディ（後書き）

更新が遅れてます。ごめんなさい。
久しぶりの更新だけど、感想いただけると嬉しいです。

相合い傘（前書き）

最初に…更新遅すぎてすぃません！少しバタバタしていたのですが、今後はまた以前のように更新して行きたいので、お願いします♪
さて、今回は初の雪ちゃん視点の上に、ｌｏｖｅ　ｓｔｏｒｙｓ初の告白です！是非読んで下さいまし。

相合い傘

得意か苦手かでわけるなら苦手。
好きか嫌いかでわけるなら…好き。

相合い傘　ｓｉｄｅ雪

それはもう3年も前の中学の時。
1年で同じクラスになり、すぐに親友になった伊織が紹介してくれた秋山実君。
伊織の幼なじみな彼。
正直に言うと凄く苦手だった…と言うより、怖かった。
遅刻とかサボりとか…そういう事で先生に怒られるのも全然平気で、そういう態度がなんだか怖かった。

そんな彼の印象が変わったのは中学1年の梅雨の時。
その日は毎日降り続く雨に飽きてきた…そんな日。
伊織が用事だからって珍しく一人で帰っている時に見ちゃったの。
実君が捨てネコに自分のビニール傘をかけてやってる所を。

「実君…。よかったら傘に…。」
濡れてる彼を見て思わずそう口をついた。
「あれ…？雪ちゃんじゃん。もしかして…見てた？俺、カッコ悪っ。」
実君はキョトンとこちらを見た。
ネコに傘をあげた事をカッコ悪い事と思っているなら…
「そんな事ないよ！カッコ悪くなんかない！」

言った後で凄く恥ずかしい気がしてきた。
頬っぺたが赤くなる。
そんな私の様子に実君は鼻で笑う。
「雪ちゃんにそう言って貰えると嬉しいねぇ。」
そんな事言うからますます赤くなったんだ。

何を話して帰ったかは覚えてない。

ただ…気になり出したのは間違いなくその時で…。
彼の何が怖かったの？
何が苦手だった…？

彼を想う時間が日に日に長くなって、彼を探す回数が日に日に増えて、彼への気持ちは日に日に大きくなって行く。

それから3年。
言い出す勇気も無いまま…膨らましつづけて大きくなった、この気持ち。
ただ…好きだと言う純粋な気持ち。

「あっ、雨か…。」
下駄箱で靴を履いてから、一人呟く。
今日は傘を持ってきていないんだ…。
「どおしようかな…。」
濡れて帰るか…止むまで待つか…。
「あれ？雪ちゃんじゃん！どおした？もしかして、傘無いの？」
聞き間違えるはずがない。
「実君…。今まで部活だったの？」
後ろに立っている実君の方へ勢いよく振り返る。
「うん、そう。雪ちゃんも？って…俺の質問は無視！？傘無いなら

一緒に帰ろうよ♪送って行くし。」
「えっ…良いの！？」
ウソみたい…。3年間、どれだけ想ったって2人きりなんて一瞬だけで…昔はずっと伊織も一緒にいたし、高校に入ってからは定君達も加わって6人が多くて…私と実君が2人で喋る事なんて、数えるくらい。
「あっ…うん！ありがとう。」
そうだ…3年前の雨の日以来かもしれない。
実君はもう覚えてないだろうけど…。
「にしても…雪ちゃんと2人なんて、我ながら珍しいよな！そう言えば昔もこんなことあったっけ？その時は雪ちゃんの傘だったけど。」
実君が屈託ない笑顔を見せて言う。
その言葉だけで、私は舞い上がってしまうんだ。
実君が覚えててくれた…それだけで充分だ。
…充分？ううん。
全然満足なんてしてない。
なんて欲張りな恋心なんだろう…。
3年も我慢し続けたせいかな？
ただ…知って欲しい。私の気持ちを…。

気が付いたら、頬を涙が伝っていた。
「ちょ…雪ちゃん！？何で泣くの？うわぁ…俺、何かした？」
実君が慌てて私の涙を手で拭った。
暖かい手の温もりが、私の冷たい涙を吸っていった。

「好き…なの。こんな事言って、迷惑なのは知ってる！でも…ずっと実君が好きだった。」

始まりは3年前の雨の日。

２人で肩を濡らしながら入った傘の下。
ただ…楽しかった。
３年ぶりの雨の日。
一緒にいるとただ切なくて…。
新しい２人の始まりの日になれって…ただそれだけを考えてた。

相合い傘（後書き）

告白…いかがでしたか？
返事は？って事で返事編はまた別の機会に書きます！返事編は実君視点で書きたいな…。
ポツポツｕｐしてますが、一応ストーリー制を持って書いてるのでご安心下さい！
ご意見ご感想など大歓迎中です★

死刑宣告

君が俺に告げた言葉。
頬を赤く染めた君。
いつもは俺たちに優しい音楽室だって…
その全てが、今の俺にとっては死刑宣告同然だ。

死刑宣告　ｓｉｄｅ定

嘘だろ…？
その言葉を理解する為には、永遠に思える程の時間を必要とするから…。
「へぇ。」
だから、曖昧で、安っぽい、ありきたりな言葉しか出て来なかったんだ。
「あれ？定君ならもっと驚くと思ったのに…。私だって、自分の事なのにビックリしちゃったんだから。」
はにかみながら言う雪。
そんな彼女も…ただ愛しい。

『実は私ね…実君と付き合う事になったんだ。』
君が照れながら俺に告げた死刑宣告。
大げさなんかじゃなく、本当に『死ね』と言われたかのような、胸を貫く痛み。
まだ、自分の気持ちを…好きだと伝えてさえもいないのに。

「いや…あの…ビックリしすぎて。そっか…。」
この気持ちを伝えたらどうなるだろうか？
雪は…どんな顔をするだろう…？
「まさかＯＫだなんて思ってもみなかったけど…勇気だして伝えて本当に良かった。」
いつもより饒舌な雪。
この嬉しそうな表情を一瞬だけ憎らしく思う。
今ならこの表情を…困った顔にだって、泣き顔にだって出来るのに、これ以上幸せな表情を作る方法を俺は知らない。
「雪…。あのさ…俺…俺さ…。」
「ん？」
俺にそんな事、出来るはずもないけど…。
「俺、そろそろ部活行くわ。」
「あっ、うん。なんか…ごめんね。私、自分の事ばっかり話しちゃって。」
「別に…。」
どうせ俺はヘタレで、女子の間で密かに行われている投票では『いい人止まり部門』でダントツの１番だ。
「また、音楽室に遊びに来てね。」
「おぅ。」
「…定…君？」
名前を呼ばれた弾みで、つい『好きだ』と言う言葉が出そうになる。
まだ伝えていないのに…。
他の奴のものになるなんて…最悪だ。
「あのさ…おめでとう…だな。仲良くやれよ。」
あぁ…本当に最悪だ。
笑顔の雪に背を向けて、廊下に飛び出し、勢いで階段を駆け降りた。
「はぁ…。」
２階程降りた階段の踊り場で足を止めた。

諦める準備なんて…まだ出来ていないのに…。
もう、音楽室は見えないのに、俺はもと来た方を振り返った。

君の事になると、好きだと伝える勇気も、
きっぱり諦める潔さも無くなって…。
今は臆病な自分が情けないだけ。もう、伝える事は無いだろうけど…
ずっと、雪の事が大好きだったんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2290c/

love storys

2010年10月31日13時22分発行